

〔曲 名〕 Minuetto in Sole e Gavotta

ト長調のミヌエットとガヴォッタ

〔曲 種〕

〔作曲者〕 Ludvig van Beethoven

ルードヴィッヒ ヴァン ベートーヴェン

〔編 曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

ベートーヴェンの四つのマンドリンオリジナル曲は元来ソロ曲であり、合奏に編曲されたものもあるが、余り演奏されていない。

その他大小様々な編曲があるが、こうした古典曲に馴染みの薄いことは

譬（たと）えマンドリン音楽がロマン華やかな時代に開花したものであっても欠陥の一つである。

曾（か）って我が国のギター界が古典を疎（おろそ）かにして、近代スペインと前古典を並べて得々としていた事があったが、

徒に抒情だけに惑溺せず、技術的にも内容的にも一般音楽の古典を併せ学ぶことを怠ってはならないのである。

この二つの舞曲は、いずれもヴァイオリン曲ではあるが、ミヌエットはセコヴィアもギター曲にしているほどで、弾き方次第で汲めども尽きぬ味の出る曲。

ガヴォッタの方は、曾って筆者が私刊した古典マンドリン合奏曲集 7 集に載せたものであるが、殆ど上演されないのは、

総譜（スコア）から曲の内容を汲み取る力の乏しいアマティアマンドリン界一般の欠陥の一つでもある。

今回再刊に当たってパート譜を詳細に譜形、運指、奏法を改訂補足した。（特に第 2 マンドリン）

従来マンドリンオーケストラ曲のギターパートは、専（もっぱ）ら和音とリズムを受け持つ役が多いために、

隅々主役的旋律があっても、ギター独特の甘美な味を発揮できない場合が多い。

本曲でも特にハ長調に現れるメロディなどは和声的旋律（同一和音内を辿る）であるために、開放弦が混入していると、前音と重なって旋律として浮き上がらないのである。

従って、どの音も左指で抑弦した音を使って無意識に音の重なることを避けたい。

1993年 8月 発行

マンドリン合奏曲集8集（JMU版 パート譜付）より